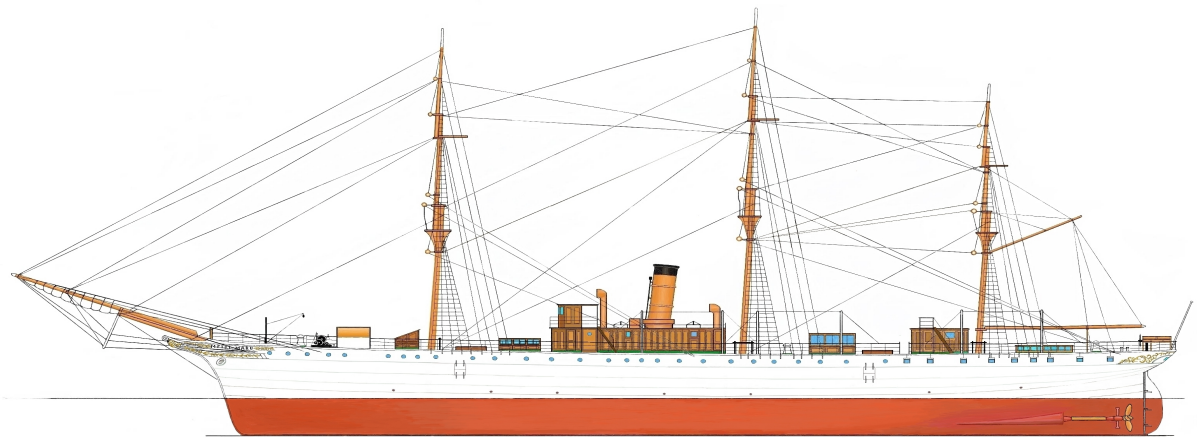


Ocean

海洋塾機関誌第23号



日本海洋塾のURL



Ocean記載のURL

令和4年12月15日

特定非営利活動法人 **日本海洋塾**

日本海洋塾は、世界を結ぶ海と船を、広く皆様に伝える活動により、海洋立国意識の拡充を目指しています。



§ 長尾卓治さんの遺稿 §

正会員 松崎 光男

永年に亘り、海洋会ボランティアクラブ（以下 VC）の会員であり、又、我が海洋塾の会員でもあった、長尾卓治さん（TN5）が、2022 年（R4）11 月 26 日急逝されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

小生は、VC の活動に参加してから長尾さんとお知り合いとなりました。偶々、小生の家内の長姉の夫（TN5）が、長尾さんと同期、同級生であったことから、親しくお付き合い頂き、メールをとおして様々な写真や情報、意見の交換などを行っていました。

小生が VC の幹事を務めていた頃にコロナ禍が発生し、ガイド活動を中断するの已む無き状況となった為、役員会の決定を経て、ガイド活動中断中の会員のモチベーション維持を目的として、「海洋会 VC だより」（以下「VC だより」）を発行することとなり、他の幹事 2 名とその編集に携わりました。ガイド活動中断中の役員会の動きや、VC 会員の動向、大学や明治丸の状況等の情宣の他に、VC 会員からの投稿も掲載する方針で、VC 会員の方々に投稿をお願いしたところ、長尾さんから小生宛に、メールで数々の寄稿を頂き、その一部を「VC だより」No. 6 & No. 7 に掲載させて頂きましたが、残念ながら「VC だより」は No. 7 をもって中断されました。

長尾さんに、既に頂いていた寄稿文の扱いについて相談したところ、「貴兄に任せる」とのご連絡があり、以降、一部を「Ocean」20 号に掲載し、次の機会を窺っていたところ、先述のとおり 11 月 26 日に急逝されてしまいました。

長尾さんが残された貴重な寄稿文は、既に「VC だより」や「Ocean」に掲載したように、VC の創世期の話や、ご自身のことについての話が殆どであり、本来は、小生が提案していた「VC の 30 年史」に記載されるべきものとは思いますが、「VC の 30 年史」作成の構想も、その後の VC 役員会で没となりましたので、長尾さんのご遺志を記録に留めたいと考えて、寄稿文の幾つかをここに纏めて記載させて頂くこととしました。

尚、寄稿文の内容は、Original のままであり、万が一、事実関係に齟齬があることも考えられますが、「長尾さんが記憶されていたこと」としてご理解頂きたく存じます。



私は、大阪府立高校（旧制第五中学、第一が北野、天王寺、高津と古い順に続く）卒業で、当時まだ戦後の経済難、食料難の時代であり、大学進学にあたり、出来れば家から 1 時間の神戸商船大学（KB）を選ぶのが自然でした。しかし、その 2 年前、新聞記事で、「和歌山の自由党有田代議士が、昔からの伝統の地、深江に、商船大学を設置することを提言した」という記事を見て、深江に見学に行きましたが、一期生の生徒がチラホラ

見ただけで、国会で審議された記憶もないので、私立ではないかとの印象を持ち、当時は既に清水の地に商船大学があったので、KB へ行くことを give up しました。

KB の関係者は、一期生の入学式の日を【創学日】と言う用語を創りました。その後、国立の status が与えられ、私も卒業の時には東京 (TK) を冠することになった訳です。小学校も入学は「国民学校」で、5 年生で終戦、「小学校」で卒業です。結果を見れば、歴史に翻弄されたことになりましたが結果 all right です。

NYK の吉野さん、K Line の浅見さん共に逝き、最後の Boss MOL の三隅田さんも老人ホーム (96! 歳) で、私にも (訪問に及ばず) と言われました。と言うのは私が OSK (MOL) に入社して最初の船の C/O が三隅田さんでした、その後コンテナ第一船で Cap と C/O の関係で、その他を含め 15 航海もご一緒した間柄ですから何でも言い合えるのです。

(注 : 2021 年 2 月の寄稿です)



(注 : 小生が「河津さくら」の鉢植えの写真を送ったことから、以下の話になりました)
「河津さくら」は、私には懐かしい名前です。

駿河湾の巡航は、一年生はバラスト、二年生は位置測定、三年生は艇長 skipper, 四年生は advisor と称して艇長からの要請がない限り、権限なきお客様という、今の社会でも通用する立派な慣習でした。伊豆半島西、東の凡そ 20 以上の港、湊、小さな泊地を回りました。

交通の不便さから下田、河津はヨットだからこそ行ける所だと思っていました。1000m を越える山岳と、温泉と、平地の全く無い伊豆半島が好きになり、三隅田さんと伊豆高原に基地を設け、伊東港にクルーザー (晴海のポートショーで購入したボルボ-ニンバス、二人で回航) を置いて 80 歳で自動車を止めるまで続けました。

巡航では現地の娘さんとネンゴロになり、旅館の若旦那に収まった者が二人いました。そもそも旅館は、自分の娘にしっかりした婿養子をとるのが多いようで、一人は、下田の武山 (ぶざん) にある武山荘で、30 年後に家族で行って見たら、下田の何処からでも見える山頂に、巨大な【国際観光ホテル武山荘】となっていました。しかも航海士のセンスが認められたのか、下田の観光協会の会長になっていました。

もう一人は、伊東の東端の岬の手前にある【旅館えびな】に、やはり見込まれて？婿養子となりました。これも 40 年後、三隅田さんとクルーズ仲間で花火見物の宴会で使用しましたが、これも立派な五階建てのホテルになっていました。当時の思い出話をしたところ、笑い話が盛り上がり、大サービスをしてもらいました。彼も、伊東観光協会の会長をつとめていました。

こう言った思い出は、現在の越中島では想像も出来ないホロニガクも楽しい思い出です。



海洋会 VC 初代代表 安部裕夫(旧 KN37)さんは、海洋会の三隅田会長(当時)を唯一呼び捨てに出来る強面の人物でした。

終戦後、日本の商船は壊滅し、其々の海運会社に戻る前に US Navy の LST で国内の物資輸送に携わっていました。海外の引き揚げ者輸送もしたそうです。海運会社に復活する前の船舶運営会時代の LST 運行で、C/O が安部裕夫(海洋会初代 VC 代表)、一期後輩が 2/O の三隅田(海洋会会長)、3/O は二期後輩の高尾一三(後の「宗谷」航海士)と言う、狭い狭い社会なのです。

三隅田さんによると、LST 時代は物不足の時代であり、安部さんに色々商売を教わったそうです。昔から海軍の伝統で、米、酒、菓子は豊富にあったそうですから。

その後、安部さんは時代の流れを読んで、海上保安庁(JCG)の技術装備部の油污防止関係の資材製造販売の会社を立ち上げ、時流に乗って莫大な資産を築かれたようです。1991年に海洋会 VC を立ち上げ初代代表となった頃は、新橋駅前広場のニュー新橋ビルの 5F に会社の看板を掲げて、三浦半島にも海岸付きの別荘も購入して羽振りが良かったです。商船大学では習わなかった商売人を感じました。そんな happy な時は長く続かず、間もなく奥様、続いてご本人も亡くなりました。お宅は鷺ノ宮でしたので中野の斎場に三隅田さんと共に参列しました。

もう一人 JCG 勤務で VC 会員の野間寅美(SN4)さん【何故か銘板に見当たらないが】は、四日市のコンビナートの公害の解決を指揮指導した方で、VC 活動にも熱心でした(埼玉県入間市)。

私と JCG との関わりは、IMO の事務局長が日本人であった時、世界的遭難救助システムの開発にあたり、これは船用無線業界にとって Big business と捉え、官民(海事局安全基準課国際 2 係、民間は R70 と称する技術と資金の総合力を結集)一体の体制を結成。その委員長に私の親分の庄司先生が就任しました。先生は船用無線工業会の顧問も兼務していたので、会議の進行は smooth でした。実証実験は JCG の船艇と航空機により相模湾で実施。この時、私は先生の助手をしていたため JCG の幹部とは顔馴染みになりました。海事局は JCG の絶対的上位にあることも知りました。

そんな訳で VC は庄司先生と火曜日の当番を一緒にしました。

三隅田さんの一期後輩の測量船の船長から、三隅田さんに「JCG が veteran 船長を探している」との知らせがあり、三隅田さんか同級の警備救難監(制服組の top)の野呂隆さんに聞いたところ、英文航海情報誌(月刊)を刊行するにあたり ①英語に慣れていること。(海上保安大の者は卒業の時 TS「こじま」で世界一周するのみで世界を知らない)②大型船舶を知らない。(JCG で一番大きいのはフランスのシェルブールから MOX を日本に運ぶ船舶の護衛の為に新造した【しきしま】2000G/T ですから、VLCC 等の運航実態

を知らない)と言う話を聞いた三隅田さんから【お前行け】の一言で決まったわけです。報酬は月刊表紙込み 50 頁、45 万円。資料収集は、全世界の水路部と IMO, IHO と直接交信出来る水路部としました。中東海域は Lloyds と NATO の行動が link しているのによく交信しました。UK との交信は署名入りの個人的関係になりやすく、お互いに旅行などすると予定が狂うことがありますがお互い様です。

70 歳で視力の減退があり 126 冊で引退しました。後任は MOL, NYK 共に経験者不在となりました。Lloyds Fair Play(私の雑誌を転載していた関係で)から UK で仕事しないか、800lbs, 住宅、自動車付きと言う Offer でしたが、70 過ぎては interest ありませんでした。JCG も私の居た頃水路部は 680 人居たのですが、巡視船にまわされて、現在は 360 人まで減らされています

安部、三隅田さん時代は、商船学校の卒業生が自衛隊、海上保安庁へ就職される方も多く艦長、船長になれて良かったのですが、防衛や海上保安大学校が出来てからは越中島からは艦船の No. 2(航海長)までしか成れない差別を受けています。

私の場合は、求められて JCG に入った経緯と、同じ世代が幹部に揃っていたこと、例えば、商船大学も受かったが、月給も貰える保安大学校を選び、制服組トップに昇進した方等々、良き理解者がいて助かりました。水路部の測量船船長 OB には、三隅田さんの一期後輩がいて、私のことを色々報告していたそうです。

庄司先生の Life work は ①駿河湾で忽然と消えた TS 月島丸の調査。その為世界の最新鋭の Sonar 約 150 種類を調べました。②先生の級友 TN117~121 の戦没地域、海域の調べ。これは私の領域ですからアッツ島からレイテ、サイパン、ブーゲンビル島に至る約 50 海図を提供したら、ナント工学部長の大津浩平君から礼状が来て、これは庄司先生の指図だと感じました。

庄司先生は JCG 庁内では IMO の政府委員として VIP 扱いで、JCG の会議の帰りには必ず私の所に立ち寄って【元気かね】と声をかけてくれました。VC で当番の時、その話をしたら【君が仕事をやり易くなると思って】と、いつまでも恩師と弟子の関係でした。



以前、100 周年記念館の二階へ上がる階段に、灯台の模型と共に、「南極の石」がプラケースに入れられて展示されていました。大きさは、ヒューストンの NASA に展示されている【月の石】と、ほぼ同じ大きさでした。現在はエレベーターがあるので見かけなくなりました。航海系の教材でもないし、ガイドブックにも記載がないようです。

この石は、第一次南極観測に従事した JCG の第一管区海上保安本部(小樽)所属の砕氷船「宗谷」が持ち帰ったものです。当時の航海士は、VC 会員でもあった(SN1)高尾一

三さんです。南極観測記念日には、旧観測隊員が「宗谷」に集まって手を振る光景がNHKで放映されるのですが、いつもブリッジ中央で帽子を振る高尾先輩を私は見ています(この行事はNHKの全国放映です)。

「宗谷」は、氷海に閉じ込められて「オビ号」に救助されたこともあり、その後、南極観測は、砕氷能力を増強した海上自衛隊の、「しらせ」(白瀬)に交代しました。

「しらせ」に代わってからも 艦長は越中島出身が続きました(防衛大学校は私(TN5)と同期が一期生だから船長となる年齢に達していなかった為です)。因みに、海上保安大学校の一期生は越中島の二期生と一緒に、呉市の校舎が完成するまで、越中島の商船大学と同居していました。人生色々、それから40年が経過し、私は60歳~70歳までJCG本庁に勤務したのですが、越中島で学んだ海上保安大学校の生徒はJCGの各部門の大幹部に昇進しており、楽しく仕事が出来ました。

自衛隊艦船「しらせ」の艦長も越中島の先輩が多く、「しらせ」が東京港晴海に帰港した時は、海洋会から連絡があり、【南極の氷でハイボールを飲む会】に参加したものです。氷の中に閉じ込められた一億年前の空気がパチパチと弾ける音と一緒に飲むのが趣向でした。「しらせ」の艦長のタイトルは准将(少将?)「Rare Admiral」とdoorのPlateにありました。

縁は異なるもので、数年後、私が東アフリカ定期航海の時、タンザニアのザンジバル島で、先輩の、「しらせ」元艦長に会ったのです。彼は、JICAで、日本が援助した1000ton級の客船の操船を含む運行指導の仕事でした。私の同級生(同じMOL)も操船と学課の先生、更にMain engineの池貝製作所(海王丸と同じ??)のguaranteeとして、これまた同級生(他社)、と言う関係もあったので、JICA*の支援物資(無償)を6航海続けました(1航海2か月)。南極の氷のハイボールのお礼にCapt's entertainment expensesで現地日本人会のGolf cupほか一式を贈りました。昔はこんな話は珍しくなかったのですが、今のVC会員との間には、いわゆる「潮っ気」(天下の三方、土方、馬方、舟方の何か超越した気質)が失せた気がします。



人生いろいろ、明治丸案内もいろいろ。

最近ミュージアム案内の資料がほぼ完備しているように感じています。今から20数年前、私が初めて当番に入った時の案内を受けた時の記憶をお話します。タイトルにもありますように、まさに色々あるからこそ楽しいのです。

私の最初の案内人は、なんとVCの元祖とも言うべき庄司先生でした。

今から述べる幾つかの話が、数ある資料の中にどれだけあるか？

(1)舷門に入って左前方にある壁面上部にある赤い星のマークは？【 】内は先生の話です。

【私の学生の頃には無かった。星は陸軍のシンボルである。昭和20年8月終戦を迎

え、9月20日から本学校舎は米国陸軍第7騎兵師団に進駐された。当時明治丸は水上係留されており、船内はペンキ塗装され、中甲板はダンスホールとして使用された。星のマークはその時の名残ではないかと思う。余談だが、米軍の後は防衛庁(当時は省に非ず)幕僚監部が占居、海上保安庁(戦後の新組織)の海上保安大学校が呉市に出来るまで一期生は本学の校舎を使用した】

当時、私達学生は、酔っぱらっては正門の防衛庁の看板を学生寮に持ち帰り学生課長だった庄司先生に迷惑をかけました。そんな因縁で先生は私をVCに呼んだのかも知れません。

(2)【上甲板の二階建て(海図室の上)の操舵室は学校に移転後造られたものであり、舵輪に接続している chain や wire を遠隔操縦として動力で舵を動かした痕跡はない。】

現在は、操舵室は見学ルートから除外されているが以前は説明が難しかった。コンパスと一体となっており見せてやりたい気持ちもあります。

(注:「明治丸史」によると、上甲板の二階建て(海図室の上)の操舵室は、明治丸が明治29年に商船学校へ貸与される前、明治25年の改造工事で新設されたと記録されていますので、庄司先生の説明、或いは、長尾さんの記憶が間違っているのではないかと考えます)

(3) 先生【長尾君、船橋は何故 bridge と言うのか知っているか】 私??

先生【今、ここでこの話をしたのは、その説明ができるのは、明治丸のこの場所だけだからだ。操舵室を囲んで左右舷をめぐる handrail がある。何に見えるかね?】

私、橋の欄干です。先生【そうだ橋だ。そのまま bridge だ。昔は船長、航海士はこの橋 bridge を左右に歩いて見張り、当直をした。これか船橋の語源だ】

私は retire した今始めて知った。客船では bridge 見学が乗客に人気があるが、この話を知っておけば良かったのにと、残念でした。現在の船は、昔の操舵室か左右舷一杯に広がって aircon 完備で、橋の面影はありませんね。私はこの話だけで VC に参加した価値があると思っています。

(4) Saloon の table の最船尾側(通常、船長席)の床にある grating は何か、【Captain's wine cellar】か?帆船時代の名残か?

(5) 先生【船尾外側にある2個の ring は何か?これは毎年講堂である symposium で、明治丸の七不思議の一つである】

私は、先生は授業で船の定期検査のことは教えても実務は知らないものだと分かりました。船の定期検査では、舵、screw and shaft を取り外して磨耗の検査を行うが、何れも重量があるが、この場所は shore crane が使用出来ないので turn buckle で吊るして作業するための ring です。最近では船も大型化して、舵、screw 共に重くなった為、ring ではなく分厚い eye を溶接してあります。 珍しく大先生が教え子から教わるお話でした。現在はこんな関係がないので寂しいです。

(6) その他、造船所や専門 maker の見学者からもドキリとするような指摘を受けることも多々あり、これも私のボランティアの楽しみです

もう一つ、バス 1 台でやって来た、【東京琉球会】の幹事に目的を聞いたところ【琉球王朝の皇太子が明治丸に乗船した記録がある】との事で、私は初耳でしたが、どなたかご存知ですか？

明治丸の不思議発見楽しいですね。



VC20 余年の思い出を思い付いた時に断片的にお知らせします。系統的な回路は断線しているようですから。庄司先生も米寿を過ぎた頃からメールが手紙になり、【PC が壊れてしまいました。小生同様修理不可能のようです】とありました。

ところで、明治丸の近くにあるアカンサスは、2000 年頃、先生か辻堂の家から株を持ってこられて植えたものです。勿論船尾の飾りの説明の為ですが、手伝いをした私と堀江さん(TN3)は 2 株ずつ貰いました。

強い植物です。ぶどう、オリーブと共にキリスト教と関係があり、パルテノンの柱や、教会の柱の頂部の飾りに見られます。上野公園に沢山あり芸大の校章です。元ミュージアム事務長だった和田(東北大、本学、フィルムセンター)は良く手入れをしてくれていました。



【観覧者に対する安全】は、ことあるごとに叫ばれ、正論ではあるが具体策は進展の無いのが、現状だと思います。

私は個人的に以下の方法を取っています。

5~15 名のグループは予約無しに時々あります。殆んどか高齢者です。私がやっているのは、寒い時期だけですが、乗船前に【皆さんのコート、手荷物、カバン等、狭い階段や通路で邪魔になるので、お預かりします】と言うと、時には入り口左側の並んだ椅子の上に山盛りになることがあります。カバンが多いと見張りが心配になることもありますが、皆さん手ぶらで軽装で階段を登っておられるのを見ると、これで良かったと思います。時には事務室の女性事務員の方が見張りを手伝ってくれることもありました。ここまでは現場 matter として良い雰囲気と思うのですが、その次の時は、ハンドバッグ、リュック、キャリーバッグ等が多かったため、事務室入り口にあるテーブルと椅子の所を使用しました。ここはドアもあるし、より安全、安心でした。

ここまでは、私の独断でやったことで、全ての結果責任は私にありますが、問題なのは、【もし、この方法を VC に提案した時】VC からは当番の人数と責任問題とか、M 機構からは、【勝手に場所を提供した、業務範囲を越えた行動をした】と協力してくれた事務員にお叱りがある虞があります。

常識的にはコインロッカーで解決出来ることですが、【予算が無い】の繰り返しで F/eng です。M 機構の人達にも VC 会員の先輩でもあり後輩でもある方々がいらっしゃる訳で、ある程度は理解をしていると思いたいのですが、一方で、VC 会員側にも付度の傾向があり、これが改善、改革の速力を弱めていると考えます。

VC の運営も、最近のように個人指導の独断で失敗し、集団指導は纏まり難くスピード感に欠ける傾向があります。

VC の業務内容も、配布用パンフレットに明記されている【観覧ご案内】であって【見学ご案内】は使用しないようにすると随分気楽になると思います。私も、始めの頃は、「グラスゴーのネピア造船所」を良く使っていましたが、観覧者はその直後に忘れていくことに気付いたからです。

観覧者の質問に答える方式が一番喜ばれるようです。グループでのツアー方式は、個人無視の方式ですから、私のボランティア精神に反するため、絶対にやらないのです。



「VC30 年史」については、30 年は epoch making 足り得ると思います。

オドロオドロした inside story は避けて、年代順に業務内容の変遷、世相の変遷、楽しかった事、困ったこと、photo を使って明治丸と学校の紹介(宣伝)、この宣伝部分は別冊として渉外活動に利用する。

VC 会員募集のため、poster、pamphlet、etc の作成、新入会員用の【30 分で回る、明治丸の見所】これは急いで作りましょう。

回顧録だから、必要と思われる個人名は title を付して記載する方が、内容が締まると思います。

コロナによる長期休業は無為に過ごすとは mental 面から危機に陥る可能性があります。今のうちに、短編、単発で良いから古い時代の出来事、感想、意見を収集されておくと、現在と今後の guideline に役立つと思います。



追記：

長尾さんは、東京・杉並にお住まいで、お孫さんが小生と同じ都立西高校に在学、将棋部で活躍している事など、私的なこともメールで情報交換しておりました。お住まいに伺ったことはありませんが、道路に面した広いお庭(オープン)に沢山の植物を育てておられました。通りすがりの見知らぬ方が、植物を見に、勝手に入って来ることもあるとのことでした。

ご自慢の「皇帝ダリア」は、決まって 11 月 16 日に咲くのだからとも仰っていました。

故人を偲んで、小生に送られてきた「長尾植物園」の写真の中から、幾つかを以下に紹介し、追悼の意を表します。(合掌)



(オープンな、道路に面したお庭の様子)



(在りし日の、お庭お手入れ中の長尾さん)



(皇帝ダリア)



(手作りの「秘密基地」)

§ NHK テレビで放映された寮歌と校歌 §

正会員 佐藤勝二郎

1. 「越中島健児の歌」

商船学校寮歌「白菊の歌」について調べている過程において、NHK アーカイブスで最近発見したのが、Ocean 20 号で発表した初耳の「白菊の歌」が出て来た番組『NHK 文化シリーズ 生活の中の日本史 「学び舎の譜」(1) -海運立国・東京高等商船学校』と紫梓の『ここにも歌がある「海の青春」』という歌番組の記録である。

この歌番組で歌われた曲の中に「越中島健児の歌」という題名を見つけ、そのような曲があったのかと驚いた。

映像確認の為に川口市にあるNHKアーカイブスに赴いたが、映像は保存されておらず視聴することが出来なかった。

また、この題名は以下の歌集等には見出すことが出来ないのである。

- ・戦前の東京高等商船学校の歌集、
- ・昭和 15 年大成丸学友会発行の「大成丸櫓歌集」
- ・昭和 43 年に東京商船大学学友会発行の「東京商船大学寮歌集」
- ・平成 6/26 年に海洋会発行の「櫓歌集」

数年前にシャンソン歌手石井好子とテレビ共演したことがあると云っていた同期生の松崎光男氏に、この「越中島健児の歌」とは、どんな曲であったのか尋ねたが、記憶にないとのことで、この数年間の懸案事項となっていた。

ところが、最近登山とゴルフ会の仲間である同級生の石原昭文氏が、カラオケ会の席で学生時代にコーラス部に所属していたことがあると云うので、若しかしたらテレビ出演していたのではないかと、尋ねたがコーラス部には短期間の在籍で出演はしていないという。

しかし、会社の先輩でもあり大学 12 回生の先輩であり、2・3 年生の時にコーラス部の部長をしていた竹花世紀氏に問合せをいただけることになった。

番組名	： 「ここにも歌がある『海の青春』」
放映日時	： 昭和 38 年 6 月 4 日(火) PM 10:00~10:29
出演者	： ボニージャックス 石井好子 東京商船大学学生 横山太郎 東京放送管弦楽団
収録場所	： 東京商船大学
番組内容	： ああ月明(学生) 白菊の歌(学生) 我は海の子(学生) 越中島健児の歌(学生) 椰子の実(ボニー) 練習船の歌(全員)

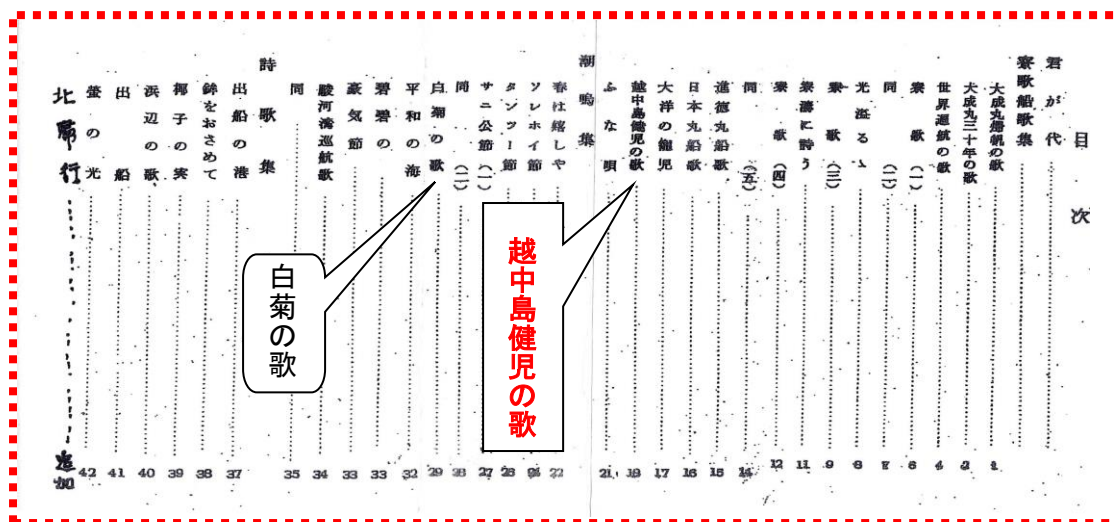
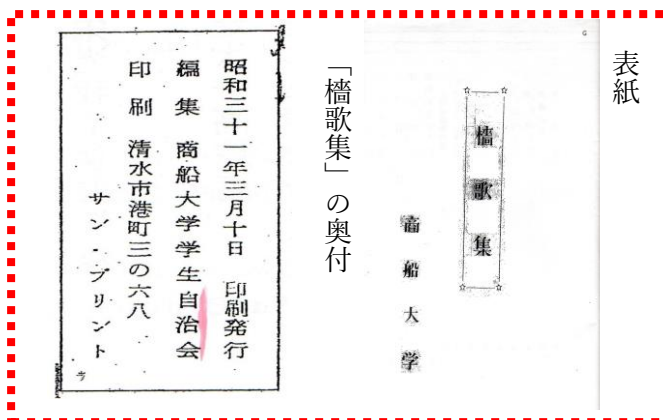
石原氏は竹花氏から『「越中島健児の歌」は「暁にひびく」であり、この曲は著名な作詞作曲者の曲であったので覚えており通称「越中島健児の歌」と呼んで周知していた、また、シャンソン歌手の石井好子が来て明治丸に案内し、そこで何曲か歌った記憶がある』という回答を得たという。

それならばと、改めて手持の資料を探ってみると、なんと、昭和31年の商船大学学生自治会発行の「檣歌集」(赤粋)の目次の18頁の項に「越中島健児の歌」があったのである。この「檣歌集」(拡大コピー版)は、平成30年4月に東京商船大学7回生で「檣濤歌集」の編集委員もされた吉田卓也先生からいただいたものであった。

18頁を開くと、確かに題名「越中島健児の歌」と歌詞「暁にひびく……」があるが、なぜか作詞者・作曲者の名前は書かれていないのである。

大学名が「商船大学」の時代(昭和24年～昭和32年)には、この他に下記の歌集が発行されているので、これらの中に「越中島健児の歌」があるのか、海洋大学越中島の図書館で調査を行った結果、②檣歌集に「越中島健児の歌」があるのを確認した。

- ① 寮歌集 商船大学学生寮
昭和27年4月発行
(目次・奥付無し)
- ② 檣歌集 商船大学学生自治会
昭和28年4月発行



戦後の「商船大学」の時代の歌集に、誰が、なぜ「越中島健児の歌」と命名したのかは謎として残るのである。

2. 「東京高等商船学校校歌」

「暁にひびく」は通称であり、昭和9年に北原白秋作詞、山田耕筰作曲の「東京高等商船学校校歌」であり、下の二重枠内が歌詞である。

<p>一、 暁にひびく 風と潮 波を蹴って進む商船 いさぎよし我等勢ふ 見よ海国男児 豪胆恒に則あり とどろけ西と東 『舊へ 海運 見よ 見よすでに昇る朝日 ひるがえる国旗今ぞ 今ぞ我が商船 越中島舊へ』</p>	<p>二、 律は正し 星と羅針 夢を繙って歌ふ商船 眉若し我等勇む 見よ海国男児 堅実しかも意図あり とどろけ北と南 『舊へ 海運 見よ 見よすでに昇る朝日 ひるがえる国旗今ぞ 今ぞ我が商船 越中島舊へ』</p>	<p>三、 氷天に守る 雲と祖国 翼搏って駿る商船 遙かなり我ら奮ふ 見よ海国男児 忠烈胸は鏗たり とどろけ海と陸がと 『舊へ 海運 見よ 見よすでに昇る朝日 ひるがえる国旗今ぞ 今ぞ我が商船 越中島舊へ』</p>
--	--	---

東京商船大学資料館には、昭和十一年発行の Columbia A-352 (1202285) 版の古いレコードが残って居り、歌詞はこれに拠った。
東京高等商船学校の旧校舎は木造で、洋式の宮殿を思わせる建物（明治三十五年一月十一日落成）であったが、関東大震災で焼失した。そこで昭和五年十二月起工して昭和七年十一月に落成したのが現在の一号館である。この年の十一月二十四日午前十一時に校旗の掲揚式が、ブラスバンドの伴奏で校歌の合唱のもと行われたとあり、この新校舎の落成を記念して校歌「暁にひびく風と潮」が作られた。そこでこの校歌は新校歌と呼ばれ、「総帆追風に揚げさせて」は、旧校歌と呼ばれるようになった。

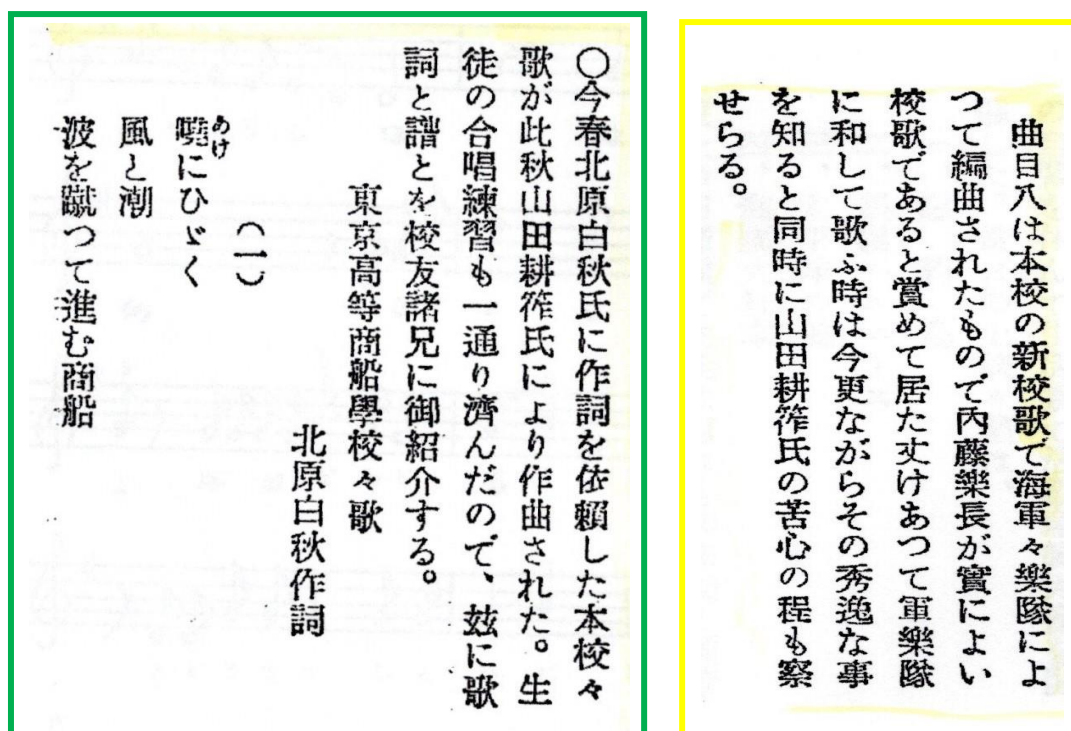


この新校歌に関して海洋会発行の「檣濤歌集」に青梓のような解説記事がある。昭和7年11月の校舎本館と図書館の落成記念の校旗の掲揚式に「暁にひびく風と潮」が合唱されたと記述されているが誤りで、校旗掲揚式で歌われたのは旧校歌となる商船学校校歌「総帆追風に揚げさせて」である。

新しく出来た「東京高等商船学校校歌」に関して、戦前の商船学校校友会会誌（海洋）418号の「越中島たより」では、簡単な紹介記事のみで、通称となる「暁にひびく風と潮」が副題にもなっていないし「越中島健児の歌」とも云っていないのである。

また、完成披露の式典の記事も見当たらないのである。

この歌が学校内でどのように取り扱われていたか探るために、戦前の商船学校校友会誌（海洋）の「越中島たより」の記事を拾ってみた。



- 418号 昭和9年11月号東京高等商船学校校歌の完成記事（緑梓）。
- 421号 昭和10年1月8日に軍楽隊が生徒寮道場にて校歌（暁にひびく）演奏。
- 426号 昭和10年6月6日に越中島音楽部がNHKで校歌（暁にひびく）を放送。
- 427号 昭和10年7月12日に生徒寮道場にて海軍軍楽隊の演奏会があり、最後の8番目に校歌が演奏された（黄梓）。
- 428号 昭和10年8月18日にJOBKで東京及び神戸の高等商船学校校歌の他に6県立商船学校の校歌がヘルデル合唱団によって男声合唱が放送された。

- 433号 昭和11年1月9日に観閲式挙行後に講堂で海軍軍楽隊が4番目に校歌演奏があり、その後校歌練習があった。
- 439号 昭和11年7月4日に道場に於いて海軍軍楽隊の吹奏楽演奏があり5番目に校歌が演奏された。
- 444号 昭和11年11月28日に東京高等商船学校創立60周年記念式典後の京浜秋季懇親会でコロンビアレコードの校歌が披露された。
- 445号 昭和12年1月10日に閲兵式後海軍軍楽隊の校歌を含む演奏を聞いた。軍楽隊指導の下で校歌の練習を行った。
- 469号 昭和14年1月9日に観閲式終了後講堂にて海軍軍楽隊の演奏を聞いた。10番目に校歌が演奏された。
- 479号 昭和14年11月9日に砲術学校への任命式後の午餐会は、校歌合唱後に散会した。

「越中島たより」には校歌の記事はあるが、「越中島健児の歌」の語句は見出すことは出来なかった。

昭和36年入学の筆者の学生時代にはコンパなどで、この曲を実際に一度も歌うことはなかったが、この曲を聴くと厳寒の早朝の寮内に、この曲が響き渡り、急いで作業服を着てポンドに駆け付け、カッターを漕ぐ訓練があったのを思い出すのである。

コロンビアのレコードは、パソコンやスマホで「A25 暁にひびく」と検索すれば、帝国海軍軍楽隊が演奏する校歌を視聴することが出来る。

3. 「健児」の歌

「健児」の意味はGoo辞書によると「血気盛んな男子、勇ましい若者」であり、三省堂現代国語辞典によると「元氣なわかもの（文章語）」であるが、言葉の印象は年齢により異なると思う。筆者は太平洋戦争中に動員された学徒、特に沖縄の学徒のイメージが湧いてくるのである。

東京の商船学校における「健児」のイメージがどのようなものであったか、また戦前の「海洋」を調べいくつか使用例を見つけた。

- ① 昭和8年8月の海洋403号の「越中島たより」に『越城健児の愛誦惜く能はぬ「吾が越城」並に「大成丸遠航の歌」は七月十八日本校生徒により・・・レコードに吹き込まれた。』との記事がある。
- ② 昭和10年7月の海洋426号の「越中島便り」の記事の中に『越中島の健児諸君よ』との言葉がある。
- ③ 昭和12年2月の海洋445号の「越中島たより」のなかに『・・・歩武堂々、越中島

健児の意気・・・』の言葉がある。

- ④ 昭和 17 年 12 月の海洋 515 号の「越中島たより」の中に寮歌募集の当選記事があり、正式題名が「東京高等商船学校寮歌」の副題が「越城健児の歌」の楽譜と歌詞が紹介されており、「ああ月明は」との題名とはなっていない。

戦後、校歌代わりに東京高等商船学校寮歌『ああ月明は』が歌われてきたが、何故か題名が「越城健児の歌」と表記されたり云われたことは無いのではないかと思うのである。

似たような事例として、校歌の無かった海軍兵学校に於いて大正 11 年の作の「江田島健児の歌」が校歌代わりに歌われていたと云う。

なぜ、「商船大学」の「檣歌集」で題名が突如「越中島健児の歌」になり、それが短期間で使われなくなったのか、解明は今後の課題である。

註：本稿は名称問題を取り扱っているのであるが「海洋会」「海洋」「越中島たより」等の表記は以下のようにした。

- (1) 「海洋会」は同窓会組織でありその名称は下記の様に変遷しているので、本稿では入り交じった表記となっている。

明治 30 年 3 月 商船学校校友会 発足
大正 9 年 5 月 社団法人商船学校校友会
昭和 13 年 6 月 社団法人海洋会
平成 24 年 4 月 一般社団法人海洋会

- (2) 海洋会会誌「海洋」の名称は下記の様に変遷しているが、本稿では出来る限り「海洋」としている。

明治 30 年 3 月 1 号 「商船学校校友会雑誌」
大正 13 年 3 月 290 号 「海事研究」に改題
大正 15 年 4 月 315 号 「商船学校校友会誌」に改題
昭和 13 年 11 月 466 号 「海洋」となり現在に至る

- (3) 学校便りである「越中島たより」の表記は、「越中島便り」「越中島だより」「越中嶋たより」「越中島たよ里」等いろいろあるので、本稿では出来るだけ「越中島たより」とした。

§ 横須賀造船所と肥田浜五郎の関り §

正会員 澤間讓治

肥田浜五郎はもともと石川島に本格的な造船所建立を立案していた。そしてそのことを前提にオランダ、イギリスへ出向いて必要機材を購入、準備万端であった時に、突然幕府内の政策変更により、候補地が横須賀に変更になり、苦い思いをさせられた事は既に述べたが、本号では、岩倉使節団の欧米視察随行から帰った後の肥田浜五郎の横須賀造船所への関りを中心に、その仕事振りを述べたい。

その後の横須賀造船所

明治六年九月二十七日主船頭肥田為良は又もとの名前の肥田浜五郎に戻った。その事情は不明だが、浜五郎の方が通りがよかったためかもしれない。同年十月二十三日には六十馬力運送船函谷の進水式を挙行、勝海軍大輔が臨場した。また同二十五日には軍艦迅鯨の建造に着手した。同じ日に勝は参議並に海軍卿に昇進している。さらに十二月四日ウエルニーの計画設計によって、数カ月前から建造に着手していた軍艦を清輝と命名した。十二月十七日、天皇、皇后両陛下が横須賀造船所天覧のため、午前八時新橋停車場発車、横浜で蒼竜丸に乗艦、午後一時半横須賀御着、所内をご覧になった。十二月二十三日第一利根丸の艦装がなり、海軍省の命によってこれを兵学寮派出員兵学少助教永田嘉之に渡し、兵学寮生徒の練習船用に供した。こうして海軍横須賀造船所は着々とその目的に向かって動きはじめた。

軍清輝の進水式

明治八年三月五日、横須賀造船所では新鋭艦清輝の進水式を挙行した。進水式の模様を「横須賀海軍船廠史」は次のように書きしるしている。中に明治丸の名前が出てくるので、口語訳を原文のまま記載する。

【この日天皇は有栖川二品親王、東伏見二品親王、伏見二品親王以下三条太政大臣、岩倉右大臣、大久保参議以下の供奉員とともに、横浜港より龍驤艦に乗られ、東、雲揚の二艦がこれを護衛し、大成丸もまた運送船として御召艦に随伴した。午後一時半御召艦が横須賀湾に達すると、湾内の軍艦風翔、筑波等は正規の敬礼を表し、肥田主船頭は本所在勤の判任官以上および雇フランス人ウエルニー外六名をひきいて、官庁前の波止場に奉迎した。

天皇は官庁でしばらく御休息になったのち、兵動主船助および正副首長の先導によって、組立工場に陣列した清輝および迅鯨の機関を御覧になり、ついで艦台の側に設置した進水式場の玉座に臨御になって、首長ウエルニーに優渥な勅語を賜い、首長もまたうやうやしく謝辞を奉答した。そのあと奏楽とともに清輝の艦船は瞬間にして海面に降下した。

当夜、天皇は向山行在所(向山海軍兵学校分校教師館をあてる)に御一泊され、翌六日午前九時還幸の途中、海軍兵学校分校および横須賀造船所の學舎を御巡覧になり、教官、生徒の奉迎をうけられた。還幸の際は灯台寮附屬の明治丸に御乗船して、竜驤、雲揚がその前衛となって、東艦、大坂丸がその後を護った。当日の出席者は親王、大臣、参議、他侍従、侍医、宮内官吏、海軍将校おおよそ三千名であった】

清輝の進水式がいかに華やかなものであったかが推測される。この軍艦は、軍艦と言ってもわずか百八十馬力で、今から考えると実に心もとないが、新形鋼鉄船であり、当時としては最優秀新鋭船であった。

横須賀造船所での艦船の新造と修理の取扱

明治八年五月三日、海軍省主船寮は艦船新造および修理取扱法を次のように改めた。

1. 石川島では艦船の修復だけとする。したがって蒸気船、帆前船などの製造は今後すべて石川島では行なわないこと。ただし、今建造中のものは竣工まで続行すること。また端船および十馬力以下の小蒸気船は石川島で製造しても差し支えない。
2. 横須賀造船所で修復する艦船は艦長、副艦長のうち一人、ならびに諸器具看守掃除のためわずかの水夫を残しておき、その他の皆は下船してよい。ただしドック入り外回りのみの修理で格別の日数のかからないものはこの限りでない。
3. 横須賀造船所では蒸気軍艦および帆前船のうち、たえず三艘ずつ製作に着手しているように心がけること。ついては軽度の修復や石川島だけで十分に修復できる艦船はすべて石川島で修理を取り計らうこと。
4. 石川島においては製作できない鑄物その他鉄物はくわしく絵図等を書いて横須賀へ申渡しの上、製造するように取計らうこと。
5. 横須賀造船所で引き受けた修復艦船の製作を石川島へ申込み製造させ、反対に石川島の方で引き受けた修復艦船の製作を横須賀造船所の方へ申し渡しするような事は、双方職場の繋閉によって便宜に取り図ってもよい。

明治八年十月二十七日海軍秘書官兼主船寮助遠藤秀行は横須賀造船所長を命ぜられ、横須賀に赴任した。ここではじめて海軍の管轄になってから、正式に日本人造船所長官に官がおかれるようになった。それまでは、主船寮が直接業務にあたり、大半は仏人の首長が采配をふるっていた。石川島造船所と横須賀造船所とで、前記のようなとりきめを行ったが、十一月二十五日、肥田主船頭は遠藤造船所長に、これからは石川島船所の修理工事はほとんどすべて横須賀造船所で受けるように通告した。これは海軍省が石川島船所を廃止し、海軍省兵器局の管轄に属させる意図があったからで、肥田が石川島造船所の拡張を主張した時とは時代背景が大きく変化した事を象徴する。

造船所の改革 & ウェルニーの解任

肥田浜五郎は岩倉大使使節団の一人として欧米を視察し、帰朝後は造船界を発展させ、日本人だけの手で立派な船をつくるようにするにはどうしたらよいかをたえず考えてきた。欧米の造船所と比較してその機構や技術の劣っている点を改革することにつとめ、さらに技術学生を養成して優秀な者は欧米へ留学させ、また日本でできる仕事はできるだけ日本人にポストを与えるようにして、フランス人を徐々に減らそうと努めた。たとえば明治二年三月には三十二人であった雇傭人が、八年九月には二十六人に減っている。

そうは言っても、明治八年初旬ごろまでは、その実質的な運営管理や指導権などはすべてフランス人の手に握られていて、徐々に改革を推進したけれども、実際には造船技術面では何一つとして、日本海軍の思惑通りにならなかった。この造船所の管理運営自主権を日本海軍の手に奪回することは焦眉の急であったが、その実行には日本に造船の実力がなければどうにもならない。

しかしこうした状況下で、日本人職員の努力や機構の改革、技術を進歩させるなど、各方面からの努力の結果、明治八年中旬ころにはそろそろ日本人だけの手でやってゆける見通しがついたので、肥田主船頭はその手はじめとして、五月二十日、川村海軍大輔に横須賀造船所の事務改革草案を提出して裁可を得た。そのあらまは以下の通り。

1. 、内外艦船の船体や機関を修理あるいは製造するにあたっては、従来の方習によって、依頼者から直接に造船所あるいは造船所首長に通告するという簡易な法を用いていたが、今後は海軍省の許可を得なければいっさいその委嘱に応じないこと。
2. 、艦船および諸機械を新造するにあたっては、造船所長官、首長と協議して海軍卿に具申し、その許可を得て起工すること。
3. 首長は艦船および諸機械の修理製造その他、建築など技術上いっさいの案件を司掌すること。
4. 、造船所長官は会計および庶務その他、物品購入等事務いっさいの案件を司掌すること。
5. 造船所の機械器具および学校その他、職工、火夫等に関する事件は、首長、造船所長官と協議して処分すべきであるが、重大の事件については必ず海軍卿の裁定を仰ぐこと。
6. 、雇傭人士官以下は内国士官および工長、工手、職工を補助して各自担当の職務に勉勵し、工業従事の内国人より質問した諸件は懇切に教導すること。その教

導の精粗は造船所長官、首長とともにこれを監督して相当の批評を加えることができること。

7. 内国技術士官は職工就業簿、倉庫物品領収書および工業用具の監守、その他技術に関する各工場部内の会計等を掌理すること。
8. 首長以下雇傭人の雇期および条約改正の事項は明治九年一月一日を期して造船所長官、首長と審議し、至当の方法を設けて海軍卿の裁定を請うため、本年中はすべて旧制を存置すること。

この事務改革案では、第一条で育長ウエルニーの自由裁量で艦船の修理、建造などは今後いっさいできず、かならず海軍卿の裁定を請わねばならことになった。すなわら従来のフランス人首長の権限を縮小制約しようとするねらいがくまれている。

したがって日本人の造船所長官は事務いっさいを総理し、フランス人育長は技術面だけを担当することとし、事業の遂行や計画については、従来は首長独裁に走る筑向があったが、両者の協議によってきめ、さらに重大案件は海軍卿の裁定と許可を必要とすることとした。

これらの事柄は、いずれすべての運営を日本人の手で行なうとする下準備であった事が伺える。

こうして第三条で首長と造船所長官の責任権限をはっきりと区別し、第六条では雇傭人が日本の職員に積極的に技術を教える義務があること、また第八条では明治九年になったらフランス人を解雇して日本人だけによる、日本人の日本人による日本人の為の造船事業を難立しようとする意図を明らかにした。肥田浜五郎は十分に日本人だけで造船所を運営してゆけると確信を持ったからこそ、このような業務改革の提案をしたと思われる。この改革案にこそ、肥田浜五郎の自信と積極性が織り込まれ、明治と言う時代の時代精神とでもいふべき壮大な気概をうかがい知ることができる。

フランス人の解雇

明治八年十一月十五日、もはや外国人を造船所の首長の重責におく必要はないとして、さきの改革案にもとづいて、外務卿寺島宗則を介して、フランス人公使サンカンタンにウエルニー等の解雇を承諾するよう要求した。その内容はおよそ以下の通りである。

1. ウエルニーは本年中に横須賀造船所首長の任を解き、その事務を日本人に継続させること。しかしウエルニーの解期は無期限であるから、政府は解雇の際に三ヶ月分の体給を贈与すること。
2. チボジー副首長は来年三月ごろ、わが国に帰着する(休暇で帰傭中)から、三月以後は造船所顧問として、さらに十ヶ月ないし一カ年間引続き雇うこと。チボジー

が帰着するまでウェルニーが代わって顧問の任にあたれば、わが政府はいつでも好都合であるが、それはウェルニーの自由意思にまかせること。

3. サバチエー医師およびモリス書記もまたウェルニー同様の条件をつけて、本年中に解任すること。

ウェルニーは十二月三十一日、サンカンタン公使の諭告に応じて、日本政府の命令を了解し、横須賀造船所首長の解任を承諾して顧問の職につき、従来ウェルニーの担当した事務については、以後は横須賀造船所長官が取り扱うこととなった。

フランソワ・レオンス・ウェルニーは横須賀造船所首長として奉職すること十カ年半に及び、年俸一万ドル、仏国海軍アンジェニョール(大技士)仏国海軍リウテナン・ド・ヴィツソー相当官で、ショパリエー・レジオンドヌール勲章を仏政府から与えられている。造船所で首長時代に担当した事業のうち、竣工した艦船は弘明丸、横須賀丸、蒼竜丸、十馬力船二隻、蒸気泥浚船、各種小蒸気船、起重檣船、その他船台三カ所、ドック二カ所、観音崎第三号灯台、品川第四号灯台、城ヶ島第四号灯台、野島第一号灯台、さらに道路、海岸石垣、溝渠、各工場、倉庫、官庁等に及んでいる。また解雇時、築造中のものは湾口波止場走水—横須賀間水道などである。ウェルニーはさらに横須賀造船所創業以来、内外艦船二百五隻の修理を管掌し、また横浜製鉄所創業以来その事務を監督し、その業績はまことにみるべきものがあった。日本の創業時の造船界に大きな足跡を残したことは疑いない。

副首長のチボジーも同様である。正式にはシュルセザール・クロード・チボジーといい、仏国海軍スー・ザン・ザンゼニョール。日本奉職は六カ年半、年俸七千二百ドル、横須賀造船所で担当し竣工したのは皇后陛下御召艦、同付属両翼螺旋小蒸気船、外輪汽船利根川丸二隻、小蒸気船(テーボル号付属船)、蒸気機械四個、同汽船其の他付属品、蒸気運送函館丸、鉄製小蒸気船、清輝艦(艦装中)があり、未竣工のものに迅鯨号、天城艦がある。

医師のサバチエーは本名をポール・アメデー・リュドビック・サバチエーといい、仏国海軍一等軍医で、仏国勲章シュバリュール・レジオンドヌールを与えられている。日本在職十カ年、年俸五千ドル、サバチエーは在職中雇外人のほか、横須賀造船所の官吏、職工その他横須賀地方の人々を治療した。

十二月三十日、チボジーは帰仏中であつたが、ウェルニーとサバチエーは解雇前に天皇に謁見を許され、勅語と勲章を賜わつた。勅語の内容と、ウェルニーが明治政府

に提出した報告書が残されているが、そこに肥田浜五郎の横須賀造船所における様子が炙り出されているので、次号ではそこから掲載したいと思う。



特定非営利活動法人 日本海洋塾
<NPO Meijimaru Memorial Academy>
事務所: 〒135-8533東京都江東区越中島2-1-6
東京海洋大学越中島会館2F
TEL: 03-6458-5272
FAX: 03-6458-5272
E-Mail: kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp
ホームページURL: <http://kaiyou-juku.org>